

JAICOH NEWS LETTER

NO : 53 2007 年 6 月 発行



歯科保健医療国際協力協議会

Japan Association of International Cooperation for Oral Health

事務局：〒344-0003 埼玉県三郷市彦成 3-86 Tel & Fax : 048-957-2286

発行：深井稜博 編集：榑崎正子、梁瀬智子

モンゴルとの国際歯科医療協力のあゆみ

日本モンゴル文化経済交流協会／黒田耕平

1990 年に政治経済の大きな転換をしたモンゴルは、日本が 1945 年から何十年もかかった経験をわずか 10 数年の間にしようとしています。そういった国民生活の急変は、口腔内ではう蝕や歯周病、全身では生活習慣病の急増という健康破壊を招いています。モンゴルの歯科医師は 90%以上が女性で、社会主義の時代には歯科治療のみで、予防はほとんど行なわれていなかったようです。歯科衛生士の学校もなく、看護師が診療補助に従事しています。私達日本人は当初、モンゴル人は遊牧生活をしており虫歯などないと想像していましたが、人口 70 万人の首都に住む定住生活者は平均 12 本のう蝕を持ち、治療歯は一人平均 1 本もないことに驚きました。



遊牧民への訪問治療

そこで、毎年現地歯科医師と一緒に首都と郡部で歯科疾患実態調査と保健予防活動を行って自立を目指すとともに、行政やメディアへ健診結果を報告することで公衆衛生の重要性を訴えました。また、モンゴル医科大学歯学科と共催でセミナーや歯科疾患実態調査・保健予防活動を行い、岡山大学歯学部と交流協定も結びました。1994 年には来日研修したモンゴル人歯科医師を中心に共同歯科診療所「エネレル」を首都に開設し、自立を目標として日本人は指導はしても一切モンゴル人への歯科治療は行ないませんでした。エネレルに提供した歯科機材は、日本の歯科大学、開業医、材料店等の好意でいただいた中古品や不良在庫品が中心でしたが、輸送費は一つのコンテナで 50 万円以上かかり、国内輸送費や簡易梱包費等も含めて大きな苦勞がありました。この診療所は 2002 年に新築移転し、地下 1 階地上 2 階で 18 台の診療台とデンタル・パノラマ等を備え、約 30 名の職員(全てモンゴル人)で一日来院患者数は約 100 人となっています。2000 年からは、このエネレルを中心に健康省やメディアの後援を得て「モンゴル歯科疾患予防プロジェクト」を立ち上げました。

全国 21 県から歯科医師 1 名を年 1 回首都に招待し講義・デモ・実習を行い、各県 100 人の 3 歳児を 5 年間検診・アンケート・予防指導を行って全国的に公衆衛生の普及を図るというものです。2005 年のまとめ会議では、対象児のう蝕予防効果はもちろん、対象児・保護者や教育関係者の協力関係の構築とデンタル IQ の向上、行政・メディア・医療関係者の理解と協力、歯科医師間のネットワーク等が成果として発表され、まとめ本を発刊できました。



健康チェック（尿検査）の指導

今後この成果を基に、今までなかった学校歯科保健の実施、様々な分野が協力しての歯科疾患予防の取り組み、モンゴル人自身による新しい「予防

プロジェクト」の立ち上げ等を目指していきたいと考えています。また、2000 年から全身の「健康づくり」を目指した健康チェック活動なども行なっています。昨年度の主な交流活動は、7 月、9 月、2 月に現地でエネレル職員・歯系学生対象のセミナー・実習、遊牧民の訪問歯科治療・予防活動・健康チェック、孤児院・障害者施設での訪問歯科治療・予防活動等を行ない、また 2 人の来日研修生の受け入れを行ないました。

黒田耕平先生プロフィール

日本モンゴル文化経済交流協会、神戸医療生協生協なでしこ歯科 小児・障害者歯科、岡山大学歯学部非常勤講師。

<連絡先>

〒651-2109 神戸市西区前開南町 1 丁目 2-25
生協なでしこ歯科

Tel. 078-978-6480

Fax. 078-978-6056

e-mail ; hpqdm355@yahoo.co.jp



今回から数回に渡り、河村サユリ先生@南太平洋医療隊の『草の根支援と南太平洋医療隊』の連載をお送りします。これは、河村先生がご経験された、JICA 草の根協力支援型事業に提案書を提出してから採択されるまでの長い道のりの記録です。JAICOH の会員のみなさまの中でも関心をお持ちの方は少ないのではないのでしょうか？

そして、この場をお借り致しまして・・・河村先生！お忙しい中、連載を快く引き受けて下さいましたこと、心より御礼申し上げます。

第1回

JICA 草の根技術協力事業に応募して (トンガ王国の歯科保健のためのプロジェクト)

南太平洋医療隊／河村 サユリ

ボランティア活動を長期に継続していくのには、人々の思いを繋ぐこと、そして経済的に安定している事が大きな鍵となるように思います。南太平洋医療隊は隊員の負担のもとに成り立っているのですが、個々の金銭的な負担を軽くし、対象国には手厚くとなると公的資金の導入は、はずせない選択です。 私たちが JICA 草の根技術協力事業（草の根協力支援型）への応募を決意したのもそれまでの3年間補助を受けていた埼玉県国際交流協会からの基金が終了する事を知った2003年の暮れのことです。 早速に JICA 事務所を訪問、事業の説明に大ききうなずかれる職員の方々に大きな期待と好印象を得た事でした。



寄贈したバンの前で、歯科スタッフの足として小学校を回ります。

当初、指定された書類の様式はさほど難しいものには思えず、熱い思いを書き綴ったものです。主語は？述語は？語尾が違うのでは？といった

修正を求められ、月に2度程度の面談が続きます。内容のチェックも同時進行していきます。 前回変更を求められ消えた内容を次の面談では記載するよう求められる等、書類作成が負担に感じられる日々が続きました。



歯磨きの光景：子供たちはペットボトルと歯ブラシを持って校庭に集合

それでも2005年2月には条件付き内定を、9月1日付で“提案案件に係る採択内定”を受け安堵したものでした。 外部有識者による要検討事項に回答書を提出し、採択を待つのですが、その間も提案書に載せた事業は遂行しなければならず、ここでの金銭的負担は一個人として大変なものでした。補助金を見込んでの活動内容でしたが、提案した以上実績として示す事が必須なのです。その後8ヵ月間は一日千秋の思いで過ごす事になります。 遅々として進まないトンガ政府への

了承取付け。後に原因はフィジーの日本大使館で書類が放置されるといった単純ミスであった事を知るのですが。2006年春、トンガ王国とJICAとの締結に辿り着き、マリマリプログラム（マリマリはトンガ語で笑顔の意味）として動き出した昨夏の活動は、従来の活動と大きく変化する事がないにもかかわらず、晴れ晴れとした気分で始まりました。トンガ王国は南太平洋に位置する珊瑚礁の島国で、3つの諸島で形成されています。

人口は11万人、1万人程度が海外で生活しており、日本にも100人近くの人々が留学や就業しているようです。多くは大きな体格を活かしラグビープレイヤーとして高校・大学・企業チームで活躍しています。トンガ王国は外貨の殆どを諸外国の援助で得ており、生活用品や食品の多くは輸入に頼っています。人々は大家族で生活をし、親族の誰かは諸外国で出稼ぎをしているのが現状です。2005年の夏には民主化を求めると同時に公務員の賃金アップのデモが起き、60%アップ等という破格の賃金設定がなされました。2006年9月に国王ツボウ4世が亡くなると、喪明けの11月には、民主化の名の下に町は破壊され、近隣国の軍隊により鎮圧された前代未聞の暴動が勃起。のどかに時を刻み、平和が魅力だったトンガ王国では今、大きな変革が始まっているようです。

南太平洋医療隊のトンガ王国での活動が始まって10年。歯科治療を提供するために訪れたトンガ王国では、英連邦に属する諸国で勉強した歯科医師を中心に公立病院歯科で診療がなされていました。自国で3年間の教育を経て生まれるデンタルセラピストが実際には診療を受け持ちます。彼らは抜歯と簡単な充填処置が主な業務で、デンタルナースをアシスタントに診療がなされています。欧州の歯科学生の研修の場ともなっており、米国・オーストラリア・ニュージーランド等からも機器・薬剤等の支援がなされています。それでも慢性的に機械は故障しており、機材や薬剤も常時不足。それ故満足のいく治療の提供は困難を極めます。南太平洋医療隊は歯科スタッフと親交を深くするなか、活動を徐々に歯科治療から予防歯科へとシフトしていきます。

トンガ王国への渡航は、ニュージーランドもしくはフィジー経由ですが、2日を要し、日曜日は安息日、飛行機で出入国できません。土曜日は休校・休診日です。隊員が1週間の休日をとってトンガ王国へ渡っても4日しか活動できません。より充実した活動を模索して行き着いたのが、マリマリプログラムだったのです。

今回は事業提案書の核となるPCM手法・参加型計画について記述します。JICAとの共通言語といっても過言ではありません。

河村サユリ先生／プロフィール

埼玉県川口市 カワムラ歯科医院（小児歯科）在職。南太平洋医療隊には2002年より補助隊員として参加。JICAの”マリマリプログラム”ではプロジェクトマネージャーを担う。



カンボジアの保育所のむし歯予防の取り組み

NPO カムカムクメール／沼口麗子

2006 年からカンボジアでむし歯予防活動を始めました。認定 NPO 法人「幼い難民を考える会 CYR」が支援をする 2 カ所の保育所でむし歯予防に取り組みたい、というお話がありそれに参加させていただいています。



保育園での給食後の歯みがき

昨秋、保育所の先生が家庭訪問をして家庭環境調査を実施しました。

それによると、子どもが使う歯ブラシ有 75%、なし 25%、歯ブラシの老朽程度は良い 25%、普通 58%、歯磨きの回数 1 回 55%、2 回 33%、歯磨きの時間帯は起床後 82%、就寝前 30%、室外で歯磨きをするが 87%、子どもだけで歯磨きをするが 65%、トイレ有 52%、なし 46%、井戸有 45%、井戸なし 51%、でした。

この結果から子どもの二人に 1 人は井戸もトイレもなく、起床後に家の外で、1 人で少し古い歯ブラシを使い歯磨きしている様子が目に浮かびます。

彼らは平均約 7 本のむし歯があります。歯が痛くて夜眠れない子もいます。痛くても放置される子がほとんどです。

ここはプノンペンから車で南に約 1 時間の静かな農村地帯カンダール州バンキアン地区です。

CYR での活動は歯科医、歯科衛生士と共に、NGO スタッフとの打ち合わせ、トレーナー（保育者）

研修、子ども達への予防教育、検診、赤染め、歯磨き指導、クリーニング（歯磨きペースト、タスカル 7 を使用）、サハライド塗布、シーラント処置、フッ素塗布、反省会と 7 日間かけて実施しています。

医療専門家が不足しているカンボジアで必要なのは予防教育だと思います。

そして大事なものは予防に対する大人の理解です。ここでは保育所の先生の教育に力をいれています。先生自身に理解をしてもらい、それを保護者に伝えてほしいからです。

この地域では歯ブラシを頻繁に買える環境ではありません。先生達は庭に自生しているスナライ（ポルポト時代に爪も磨いたそう）という葉で歯をこすり汚れを落とし、炭と塩をまぜて指で磨くこともあるそうです。毛が広がった歯ブラシを使うよりずっといいと思います。聞き取りで彼らは歯ブラシを 1〜3 年使うこともわかりました。歯磨きをしている！と強調する彼らですが、赤染めの結果は PCR100%。歯磨きはしているが磨けていません。研修では一人一人磨ける歯磨きの指導をします。



トレーナー研修

保育所ではむし歯を予防するために、新たなふたつの取り組みが始まりました。

ひとつは、昨年末から帰宅時のおやつを支給をやめその費用を朝食代にまわしたことです。家で朝食を食べてこない子が多いからです。おなかをすかした子ども達は家から持ってきたお金で保育中におやつを買う習慣があります。今回お金を持ってこない、持ってきたら没収に決めたそうです。二つ目は クメール語の「はははのはなし」（加古里子、福音館）の読み聞かせが始まったことです。他に数冊の絵本を提示しましたがこの絵本が選ばれました。

私たちの活動はまだ2回ですが、先生、子ども達の口の中は少し綺麗になりました。前回PCR100%だった先生、子ども達は2回目には50〜30%に減りました。食後の歯磨き時間が長くなりました。奥歯も磨いているからです。私たちがいない間に、NGO スタッフ指導のもと、先生達の勉強会、保護者へのワークショップ、家庭訪問時の歯磨きのアンケート調査、と活動を継続しているのがいいのだと思います。ワークショップでは先

生が保護者へ自信を持って歯の大切さを話していたそうです。

わたしたちは1回の滞在が10日から14日です。限られた時間で微々たる活動しかできませんが、現地スタッフが真摯にむし歯予防に取り組んでいます。私たちの活動は治療をしない、予防を重視した活動です。今後は知識伝達だけでなく先生達本人の自発的な「気づき」の健康学習をとりいれたいと考えています。

活動の主役はカンボジア人です。彼らを啓蒙し啓発に導くのは歯科衛生士さんたちの力が大です。活動に同行してくれた衛生士さんたちの指導やお話はとてもわかりやすいと評判です。

「もう痛い思いをする必要はないよ、むし歯は予防できる病気だよ」ということをこれらの保育所から発信し、全国的なヘルスプロモーション活動をめざして、仲間と一緒にいい汗をかきたいと思っています。

NPO カムカムクメール Email:npo@kham2.name

沼口麗子先生／プロフィール

1988年～沼口歯科医院副院長。1998年から3年間、ネパール歯科医療協力隊の一員としてネパールで歯科医療活動に参加。2004年歯科医学教育国際支援機構(OISDE)の会員としてカンボジアに滞在し、JICAの草の根技術支援型事業に参加。2005年NPO「カムカムクメール」設立。2006年カンボジアでむし歯予防活動を開始。

編集後記

国際協力に女性、それも主婦が関わるのはとっても大変なことです。きれい事では済まされません。河村先生も沼口先生も人には言えない色々なご苦労がありがたと思います。どう、両立されているのか、一度個人的にお話が聞きたい！って思っています。実は沼口先生とはネパール歯科医療協力隊の同期隊員です。活動中の寝室が同じだったことしばしばでした。あの頃が懐かしい！応援しています♥皆さんの活動報告の原稿を読ませていただく度、私も何かしなくちゃ・・と焦りばかり感じてしまいます。

新連載、とっても興味深い内容ですよね。次号もお楽しみに！（榎崎・梁瀬）